

「集いの場あゆみの生涯学習支援」

NPO法人 エス・アイ・エヌ
集いの場あゆみ 所長
副理事長 草羽 俊之

あゆみの概要

開設の経緯と沿革

『NPO法人エス・アイ・エヌ』における生涯学習支援の展開

- | | | |
|------------|-----------|--|
| 1992(平成4) | 7月 | 青年教室「こいこいクラブ」結成 |
| 2003(平成15) | 9月 | NPO法人格を取得（「NPO法人エス・アイ・エヌ」設立）
「知的障害者のための生涯学習」への取り組みを開始
（その他、視覚障害者の支援や清掃事業を
主とした就労継続支援B型事業所を2か所を運営） |
| 2004(平成16) | 6月
10月 | 「3級ヘルパー養成研修講座」を開講（2005年9月まで）
「レッツ・オープンカレッジ」の大学との共同事業を実施
（翌年3月まで実施） |
| 2011(平成23) | 10月 | 「自立を学びあう生涯学習講座」のモデル事業を開講
（翌年3月まで） |
| 2015(平成27) | 7月 | 広島市地域活動支援センターⅡ型事業を活用した
「集いの場あゆみ」を設立 |
| 2016(平成28) | 9月 | 就労をしている知的障害者の生涯学習支援の場として
『集いの場あゆみ』の活動を本格的に実施し始める |
-

『生涯学習の取組』に至るまでの経過と背景

1992年7月、青年教室「こいこいクラブ」の設立

- 学校卒業後に就労した人の「余暇活動の場」。
- 「鯉」、「恋」、中身が「濃い」、みんな「来い」
- 活動の特徴は、本人とサポーターが話し合い、当事者運営による自己決定を大切にした取組。

当初は、行事中心の活動「ハイキング」「カープ観戦」
「ボウリング」「カラオケ」「一泊旅行」などの活動。

- 更には、歌やダンスの会やスポーツを楽しむ会、ワープロを使う学習会、運転免許取得に向けた学習会、料理教室など趣味から学習までの領域へと発展。
- 運営上の「財源不足」「サポーター確保の難しさ」「運営体制が維持が困難」さが背景となり、約15年余の活動で休止した。

生涯学習の前身となる取組みの一つでもあった。

『生涯学習の取組』に至るまでの経過と背景

NPO法人「エス・アイ・エヌ」の設立

(Support Independence Network)

2003年9月「知的障害者のための生涯学習」の構想をし、事業を効果的に進めていくために、大学との連携・協同を考えた事業に取り組む。（他にも、視覚障害者の支援や清掃事業を主とした就労継続支援B型事業所を2カ所運営）

- 労働や生活での困り事や、よりよい人間関係をつくる学習を通しての支援。
- 文化・教養・趣味など個人のニーズに応じた生きがい支援。
- 社会の情勢や制度・法律・防災・安全の知識の理解と障害者の権利と人権についての意識作り。
- 社会的教養と暮らしのルール、権利などの学習。
- 休日に仲間と共に楽しめる活動と、生きがいのもてる活動の支援。

『生涯学習の取組』に至るまでの経過と背景

「NPO法人エス・アイ・エヌによる取組」

- 2004年6月～9月「3級ホームヘルパー養成研修講座」の開講

知的障害者の就労自立に向けてのキャリアアップを目標にしたヘルパー資格の取得の講座を開講し、訪問介護（ホーム・ヘルプ）サービスや配食サービスなどを対象に、知的障害者の新たな職域開拓と職場開発をめざす。

- 2004年10月～2005年3月「レッツ・オープンカレッジ | N広島国際大学」の協同事業。

NPO法人と大学との協同による知的障害者の生涯学習講座の取組。講座内容は、自分の暮らしに役立てる法律や制度などの「学びの講座」と、暮らしを豊かに楽しくする「レッツ・エンジョイ・カルチャー講座」が行われた。

『生涯学習の取組』に至るまでの経過と背景

「NPO法人エス・アイ・エヌによる取組」

2011年10月～2012年3月「生涯学習講座の開催」
～生活に役立つ知識と技術を学ぶ講座～

- (1) 「コンピューターの使い方」
- (2) 「自分の暮らしに生かす福祉制度」
- (3) 「余暇活動を楽しもう」
- (4) 「ビジネスマナー」
- (5) 「食と栄養」
- (6) 「経済生活について」
- (7) 「健康と医療」
- (8) 「自立をしたい」

＊社会福祉振興助成事業による助成金を活用して『講座の開催とテキスト』を作成

生涯学習講座の実践から学んだこと

1 学びへの期待と希望（能動的な学びへ）

学校卒業後の学びへの欲求は、自らの生活や仕事に裏打ちされた社会に出て直面する問題や願いに対する学び。

2 学びから学び合いへ

職場、年齢、地域、経験も違う参加者がグループワークを通して、お互いが学び合い、共に考えていく過程の大切さ。

3 学びを生かす相談支援の大切さ

講座による学びを生かして、夢や希望を実現したり、困り事や心配事を共に解決したりする相談者として次につなぐ責任。

4 就労や生活の変化に対応できる継続的な学び

学びを通しての関心や意識の高まりを大切にして、科学の進歩、年齢、就労・生活の変化に対応できる力を付けるために学び続けることの大切さ。

5 楽しさや潤いの時間を感じることも学び

生活の中で、リフレッシュができる楽しみの場としての活動や集団が必要。

生涯学習講座の取組を発展させるために

地域での活動として普及していくこと、そのための方法も明らかにすることも大切だと考えた。つまり、どの地域でも実践可能な学習プログラムを作成し、障害者福祉サービスを活用した事業として取り組むことが課題である。

《具体的な課題》

- ① 参加者が期間限定ではなく、継続的に利用できる。
- ② 参加者が参加しやすい活動時間が確保されている。
- ③ 参加者の学習ニーズに応じたプログラムの準備。
- ④ 参加者の学習を生かすために、社会福祉サービスなどの支援に結びつける相談活動。
- ⑤ 余暇活動としての行事や趣味や生きがいにつながる文化活動も取り入れる。

生涯学習支援の事業化

「NPO法人エス・アイ・エヌ」は、

- 生涯学習の拠点づくりと実践（取組）をしながら、利用者が必要としていることを研究できる事業として、2015年7月、広島市の地域活動支援センターⅡ型事業を活用した「集いの場あゆみ」を設立した。
- 現在の、就労している知的障害者の生涯学習支援の場として本格的な活動を開始したのは、2016年9月からである。

広島市地域活動支援センターⅡ型事業とは

この広島市の制度は、事業目的を「機能訓練、社会適応訓練等、自立と生きがいを高めるための事業」としており、生涯学習の内容と共通する部分が多くある。利用人数や利用日数は上限設定のみで、開催の曜日には制約がないため生涯学習支援には適していると考えた。

「集いの場のあゆみ」の利用者

- 利用登録者数は32人
- 職員数：平均2.5人／1日 + ボランティアによる支援
- 月の平均延べ利用者数は130～140人前後
- 男性 22人、女性10人
- 一般就労は24人、就労継続支援などの事業所は5人、
その他が3人
- 利用者の年齢構成は、30歳未満は16人、30歳代は8人、
40歳代は8人
- 生活について、家族との生活25人、グループホーム利用者
4人、一人暮らし3人
- 利用者の家族への支援が必要であったり、経済的に困窮なケ
ースもある。
- 障害の状況は全員が療育手帳の保持者であるが、精神保健福
祉手帳の保持者や発達障害の診断を受けている人もいる。

「集いの場あゆみ」の実践

《活動の形態や計画の立て方》

集いの場あゆみは、月～金曜日（以下ウィークデイ利用とする）と土・日曜日の利用では活動内容が異なる。

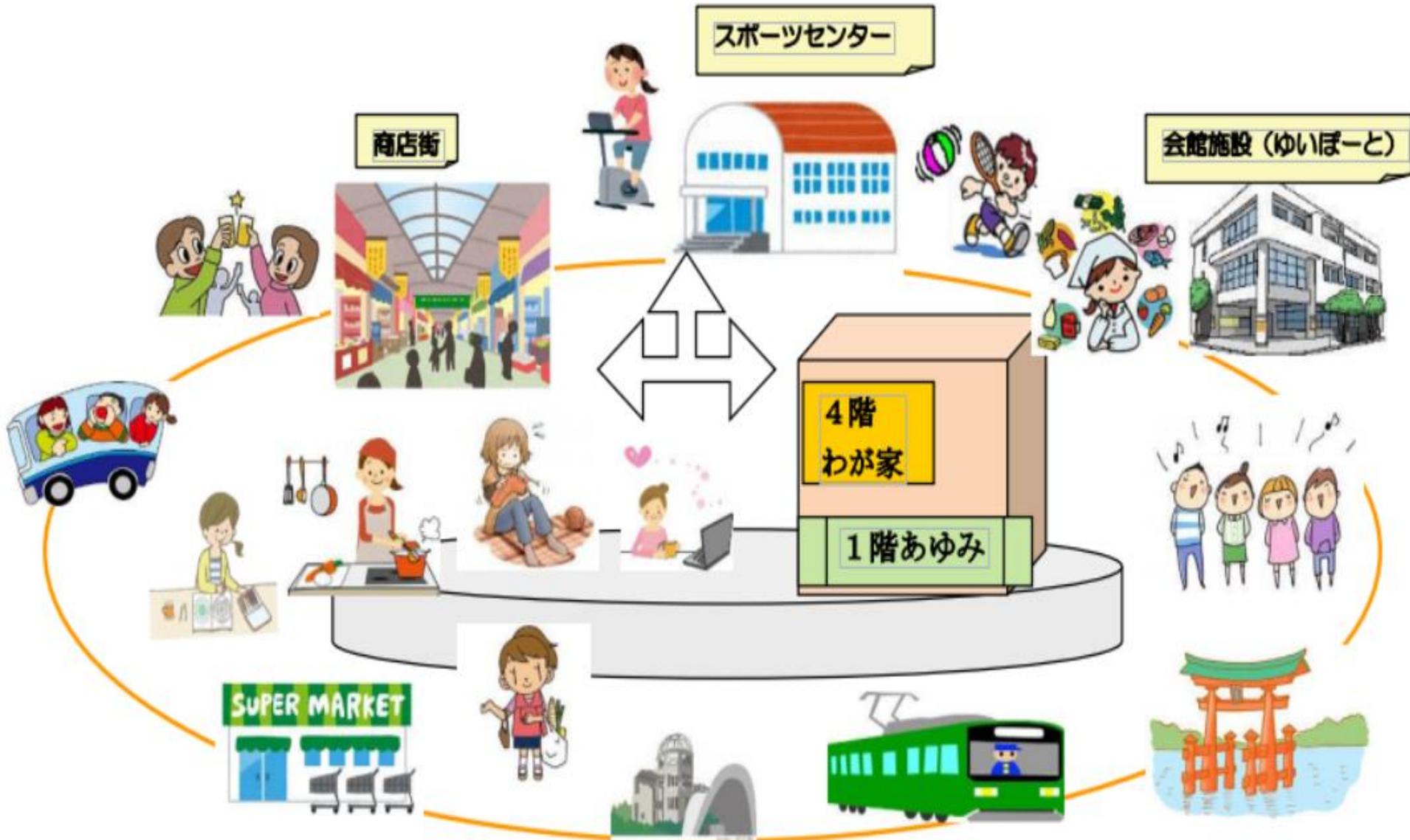
- 土曜日、日曜日（月／4回程度）は、講座形式の学習や文化活動、行事的な活動が主な内容となる。講座の内容は生活ニーズに即した内容や希望に沿って構成し、講座の参加は15～18人程度である。
- ウィークデイ（月曜日から金曜日）が休日の利用者は、1日平均で2～6人である。活動内容は利用者の希望やイベント情報などから活動メニューを考える。

《施設と立地（地域性）》

施設は、ビルの1階のテナントと4階の居室の2カ所を借りており、講座は、1階か近くの公共施設を借りて活動している。ウィークデイや少人数の活動は4階の2DKの居室で活動を行っている。活動内容によって併用している。

- 広島市の中心部、市役所、平和公園、が徒歩圏内。
- 地域の社会資源 体育館、スポーツ施設、図書館、飲食店、公設市場、スーパーなどが徒歩圏内。

「集いの場あゆみ」 広島市中区住吉町10-2



あゆみの活動プログラム

平日（10:00～15:00）

土・日曜日（10:00～15:00）

（一例）

月：スポーツ（体育館）／談話
 火：調理（わが家食堂）／ゲーム
 水：アート制作／カラオケ
 木：買い物／ランチ
 金：外出
 （美術館や映画鑑賞等）

- ◆ 学びの講座
 - ・ 健康生活 ・ 食生活
 - ・ 経済生活 ・ 福祉サービス
- ◆ 文化的な講座
 - ・ 音楽 ・ ダンス ・ ヨガ
 - ・ スポーツ ・ カープ紙芝居
- ◆ 行事
 - ・ お花見 ・ 夏祭り
 - ・ クリスマス会 等

※外出は利用者の希望、メンバー、イベント情報などを参考にして
 計画を立てる。

※平日の活動内容は利用者の状況や希望を参考にして計画を立てる。

生涯学習の実践（土・日曜日）

○学びの講座

- 健康生活・・看護師さんのチームが講師として、季節の変わり目や日常の健康管理、心のケア、生活習慣病の予防。
- 食生活・・バランスの良い食事の取り方、食と栄養の知識、食材・食品の選び方、実践的な調理実習。
- 障害者福祉サービス・・サービスの種類や制度の知識、就労や生活の支援、相談支援。
- 経済生活・・生活に必要なお金、金銭管理の方法、消費者生活

○文化的な講座

- 音楽（月/1回）・・歌唱や様々な表現活動をのペースで行っている。コンサートやゆいポートの発表会にも参加。
- ダンス（月/1回）・・リズムカルな楽しいダンス
- ヨガ（隔月/1回）・・自分の心と向き合い体も心もほぐす

- ## ○行事
- お花見、夏祭り、クリスマス会、新年会、外出（城公園、水族館、ハイキングなど）

生涯学習の実践（ウィークデイ）

○ グループ活動や個別活動

毎月のアート制作や絵手紙を描く「アートクラブ」、昼食の手作り料理をする「わが家食堂」、カラオケを楽しむ「カラオケカフェ」、体育館でバドミントンやミニテニス等を楽しむ。「スポーツ」カードゲームやテレビゲームを楽しむ「ゲームグループ」などがある。個別活動ではパソコン、手芸や物づくり、読書などがある。

○ 文化活動や行事

美術展鑑賞、映画鑑賞、展示会、ランチ、社会的施設（郷土資料館、健康科学館、気象天文館、プラネタリウム、動物園、植物園など）、イベントへの参加などがある。

○ 個別のトーク（相談）

トークは生活から就労までの幅広い困り事や悩み相談である。内容は、生活情報や諸手続の対応方法、障害年金、実務的な支援から、医療・福祉サービスや就労支援などの相談があり、関係機関とのケース会議に至る場合もある。

生涯学習支援の実践を通してわかったこと

- 1 生活に根ざした要求に裏打ちされていることが、**学びへの要求**の強さを感じる。
- 2 生活や就労の場で**活用できる支援**の大切さ。
- 3 集団の中で学びあう姿が印象的で、**お互いの経験を伝え合い、学び合う姿勢**を感じる。
- 4 学校から社会人を通して学んできたこと、身に付けてきたことを活かして自分の**趣味や生きがい**につなげる大切さ。
- 5 本人の話に丁寧に耳を傾け、聞き取り、**内実や隠されたニーズ**をくみ取った**相談活動**が**意思決定や選択**につながる。
- 6 仲間の生き方に関心をもち、**集団でしかできない活動**や**仲間という楽しさ**を感じる生活の大切さ。

「集いの場あゆみ」の現在の到達点

～実践・研究・事業を通して～

1 「安定した継続運営」

生涯学習支援を障害者福祉サービス事業で行うことは、継続的な支援と「安定した運営」が可能になり、「利用者を支える拠点として確立」することができた。

2 「学びへの要求と主体性」

本人が生活に裏打ちされた問題意識に、学びの必要性を感じて、学ぼうとする意欲や主体性を引き出している。

集団の中でお互いの経験を学びあう姿が印象的である。

特にウィークデイの取組では、生活での困り事や不便さを、本人と支援者が一緒に解決する経験を通して、学びへの意欲や自らが実行する主体性へとつながっている。すなわち、学びからの実践につながっている。

「集いの場あゆみ」の現在の到達点

～実践・研究・事業を通して～

3 「仲間や生きがいとのお出会い」

生涯学習支援が、個の志向を大切にしている活動へと取り組まれている。利用者の40%は35歳以上である。人生の楽しみ方や生きがい作りを大切にしている活動は、年相応のその人の持ち味や自分らしさを引き出す。さらに共感できる友達との出会いにもなっている。つまり、「人生を豊かに生きる」の支援にもつながる意味を感じる。

4 「活動の広がりを支える講師や社会資源の活用と参加」

生涯学習講座を支えるのは、専門的な講師陣のネットワークである。その道のプロの講師が障害に配慮した教材や支援を行ってくれる。また、講師のアプローチにより活動領域も拡大している。

「集いの場あゆみ」の地域にある男女共同参画推進センター（ゆいぽーと）の交流会参加、アートルネッサンスへの出展、コンサート出演、また、他の余暇活動グループとの共演など、市民活動への参加も広がっている。近隣の社会資源である「体育館」「ゆいぽーと」「大学」「公共施設」の利用も立地の強みとなっている。

「集いの場あゆみ」の現在の到達点

～実践・研究・事業を通して～

5 「相談から解決まで他機関との連携した支援」

利用者には生活から就労までの幅広い困り事や悩み相談がある。内容は生活情報や諸手続の対応方法、障害年金の手続き、障害者福祉サービス利用の相談から行政手続きに関する実務的な援助に至る場合もある。実際に生活での困り事や不便さを本人と支援者が一緒に解決する経験が学びにつながっている。そして、本人が支援を受けている機関や団体とも連携をとり、支援が行き届く橋渡しもしている。連携先は、広島市、特別支援学校、移動支援事業所、ヘルパーステーション、相談支援機関、就業・生活支援センター、グループホーム、就労支援施設、企業、成年後見人、などである。

6 「生活や就労の場で活用できる学習プログラム」

本人が職場や生活場面で活用できる知識やスキルを学べる内容が大切となる。実際に困っている内容に即して、支援を必要としている場所で活用できるような知識やスキルを身に付けるためには、その都度、就労や生活の中で起きる様々な問題やニーズの把握をして、解決に導く学びのプログラムの作成が必要である。また、このプログラムを様々な地域で活用できるように普及することも求められる。

「集いの場あゆみ」の現在の到達点

～実践・研究・事業を通して～

7 地域社会とのつながり

集いの場あゆみの利用者の障害は、知的障害、自閉症スペクトラムやLD、ADHD、アスペルガー、精神障害など様々である。学校を卒業し就労を続ける中で、他者との関係によるトラブルや厳しい労働環境が原因で、新たな疾病を発症したり、引きこもりなどの2次障害につながる人もいる。

地域生活を送る上で、集団参加や社会的な関係を築く場や経験を広げることが難しい人も多い。しかし、あゆみの仲間と共に活動してきた経験や、交流を深めた講座講師からのアプローチなどを支えに、市民活動や社会的な場への参加に発展していく人もいる。

「共生社会」を考えるときに、その人にとっての障壁となるものを取り除くだけでなく、社会参加を一緒に乗り越える仲間や、少しずつ自信を付けて、信頼関係を築いた場から見守る支援の必要性を感じる。

「集いの場あゆみ」は、そのような「わが家」としてありたい。

「集いの場あゆみ」の運営上の課題

(現段階でまとめると)

《当面の課題》

- 職員の確保（利用者の声を聞き取る力、持ち味を引き出すセンス、柔軟な対応が可能な人）
- 安定的な運営をするための利用者の若干増。
- 利用者のニーズに応えるための活動内容のさらなる検討。
- 利用者の支援に対する職員の力量アップのための研修機会や事例検討を深める時間の確保。
- 利用者の抱える問題の大きさ（職場での問題、生活上の問題、所得保障の問題など）に対する対応と取組の実践的研究。
- 利用者の就労・生活・学習ニーズに応じた、他の団体やグループ、行政や様々な相談支援機関などとの連携や協力の効果的な進め方。

障害者の生涯学習支援の学びとは

「集いの場あゆみ」の生涯学習支援を通してわかったことは、講座での「学び」は、生活に必要な知識やスキルを暮らしにいかす取組だけに留まらない。「学び」は楽しさや喜びを感じる文化活動や日常の仲間との交流を通して、人との関係性を築くことまでも広く捉えることができる。

さらに年齢を重ねながら、生きる喜びと希望を見つけるための、生涯にわたる「学び」へ続くとも言える。言い換えれば、人生を豊かにするために学びはあると言っても過言ではない。

人との出会いやつながりと、日常の様々な活動の経験の中にも、自分らしさを表現できる。その積み重ねが学びとなり、生活への希望や願いをもつ意欲や意思を奮い立たせている。

すなわち、その積み重ねる学びのすそ野の広さと奥行きの深さが、人生や生きがいをつくる土台となるとも言える。

障害者の生涯学習支援の学びは、そのような意味をもつ取組ではないだろうか。

あゆみの今を「まとめ」てみると

《現段階のまとめ》

生涯学習は、就労や生活の中で起きる様々な問題の解決に導く学びの過程が、自己選択や自己決定の質を高め、仲間との活動に主体的に関わることで、楽しみや喜びを感じる生き方作りに期待ができると感じている。

まとめてみると

- 生涯学習の場は、「人生に役に立つ学び」
 - 生涯発達は、「人生を豊かに生きること」
 - 個の持ち味や自分らしさが、「集団の中で輝くこと」
 - 障害者の学びは「支援と人、社会や地域につながること」
 - 生涯学習によって「年相応の生き方と喜びを感じること」
- つまり、人生そのものが、生きること全てが学びである。